

び諸の執見を食して之を摧滅す、大悲方便を作して、能く一切如來を恐怖す、此れ乃ち金剛夜又菩薩大悲方便の智なり。文餘の二臂は即ち不動大菩提心の義常の釋の如し。凡そ牙を持つるは皆金剛夜又三昧に入るなり、今不動尊、諸天主たる故に、夜又三昧に入て一切有情の無明煩惱を噉食するなり。

元文五年歲次庚申孟夏初三日閑筆

洛西五智山沙門曇

寂

### 國譯傳法灌頂護摩理記 終

## 國譯傳法灌頂諸作法私記

金剛子曇寂

- 一 灌頂曜宿
- 一 大阿受者前行日數
- 一 糸縫作法并加持法
- 一 闕伽水作法
- 一 朝作法
- 一 鎮守讀經作法
- 一 教授作法

### 灌頂曜宿

治承記に云く前記に云く日曜密尤も吉なり、鬼宿是れ寂なり、甘露、金剛峯、之を用ふ、阿闍梨云く金曜を上を爲す。

寂云く密日とは、宿曜經に云く、日曜太陽、胡には密と云ふ。密とは是れ胡語なり。甘露日とは、(二)宿曜經に云く、取意して之を引く日曜と軫と合し、月畢・火尾・水柳・木鬼・金房・土星・巳上を甘露日と名く、是れ大吉祥なり、冊立して灌頂法を受くるに宜し、寺宇を造作し及び受戒し、經法を習學し、出家し修道し、一切並に末なり。文金剛峯日とは、日尾・月

(二)宿曜經 自下  
國譯密發經軌第  
一〇頁に在り  
對觀せよ。

○ 大白星 金曜  
星。勿離訶婆婆  
木曜なり。

女・火壁・水昂・木井・金張・土亢・已上を金剛峯日と名け、一切降伏の法を作し、日天子の呪を誦し、及び護摩并びに諸の猛利の事を作すに宜し。寂按するに、金剛峰は是れ灌頂の法相應の日に非ず之を用ふるこそ不審金曜を上となすは、宿曜經に依らば、相應と爲すにあらず、亦惡曜にあらず。瞿醯經の上に云く、其の月宿に於ては○大白星と○勿離訶婆婆とに直る、豫直に吉祥と及び増益との事の曼荼羅を作すべし。灌頂法と相應する  
こゝに見るべし又云く、畢・鬼・翼・軫・角・亢・房・斗・虛・壁・奎・婁・已上十二吉宿なり。寂云く、未だ別して十二を用ひて相應とする本據を見ず。若し宿曜經に依らば、此の外に觜・胃・尾・等は、皆灌頂相應の宿なり。又出す所の亢・虛の二宿は相應の曜にあらず、即ち知る宿曜經に依るにはあらざるなり。今略して宿曜經の文を出さば。畢は農桑種蒔に宜し、○安定の事を作し、衣服を作るに並びに吉。云云。鬼は百事を作すに宜し、○入壇し灌頂を受け、密法を學ぶに並びに吉なり。云云。翼は作す所皆吉なり。云云。軫は急速の事に宜し、○藝業を學び婚娶等並びに吉なり。角は嚴飾の事に宜し。

亢は馬等を調ふるに宜し、必ず馴れ易く快なり。云云

房は朋友婚姻を結び、諸の善事に和し、喜樂吉祥の事に宜し。云云

斗は新衣を着し、及び安久の事等に宜し。云云

虛は諸の急速の事に宜し。云云

壁は永久長壽増益の法に宜し。云云

奎は珍寶を取るに宜し、倉庫を造るに宜し。云云

婁は急速の事に宜し。云云 已上十二宿

畢・翼・斗・壁・を安重宿となす、乃至齋を設けて供養し、道場に入り、及び安穩にし、

并びに師長に就き、入壇して灌頂の法を受くるに並びに吉なり。云云

觜・角・房・奎・を和善宿となす、道門に入り、技藝を學び眞言の法を習ひ、齋戒入壇し

て灌頂を受くるに宜し、及び吉祥の事に並びに吉なり。

鬼・軫・胃・婁・を急速宿となす○齋を設け道を行ひ、入學し 受業し、道場に入り灌頂

を受くる並びに吉なり。

井・亢・虛・危・を輕躁宿となす、象馬に乗る等を學ぶに宜し。云云 已上は宿曜の文にして

（二）毒害宿 參。  
柳・心・尾の四宿を  
いふ。

要を取りて之を引く、用ゐんもの往て見よ。此の中に替・胃の二宿は是れ灌頂相應の宿なり。而るを治承等には之を用ゐず。又經に尾は阿伽陀藥を合散するに宜し、並びに入壇並びに吉なり。文然れども亦（二）毒害宿の中に入れば、此の一宿は用ふべからざるか。又亢・虛の二宿も亦相應の宿にはあらざるなり。

又云く、瑜祇經に云く、心・柳・昂・牛・鬼は日月吉凶を簡ばす。云云

寂云く、翼祇の此の文の處に鬼宿なし、鬼宿は諸經軌の中に、皆吉宿となす。今意を取りて文を引く、故に之を加ふるなり。

治承記の口決中に云く、曜には日・月・木の三吉勝れたりとなす。

口傳に云く、日・月・火・水・木・金・土。

日は宿曜經に云く、命を冊し、官を拜し、職を受け、大人を見、福を造り、禮拜し、齋を設け、供養し、入學し、經理するに並びに吉なり。

月は功德を造り必ず成就するに宜し。云云

水は入學し及び一切の諸の工巧に宜し、皆成す。云云

木は命を冊し、及び善知識を求め、並びに論議を學び、法を受け、禮拜し、功德を造

り、布施等に宜し。云云

金は大人及び諸の官長に見えるに宜し。云云

又當流の相承は、曜は世間の曆に依りて、朔日の宿より之を數へ、其の相應の曜を取りて之を用ふるなり。宿は必ず宿曜經に依ると。然るに明藏（シヨウ）の經の初の横圖の中には、牛宿を加へ入る。恐らくは是れ後人の加ふる所ならん。大師請來の本には即ち牛宿を除く、今畧して横圖を出して云ふ。

月宿傍通曆

日數	正月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	
一	日	奎	胃	畢	參	鬼	張	角	氐	心	斗	虛	室
二	日	婁	昂	觜	井	柳	翼	亢	房	尾	女	危	壁
三	日	胃	畢	參	鬼	星	軫	氐	心	箕	虛	室	奎
四	日	昂	觜	井	柳	張	角	房	尾	斗	危	壁	婁
五	日	畢	參	鬼	星	翼	亢	心	箕	女	室	奎	胃
六	日	觜	井	柳	張	軫	氐	尾	斗	虛	壁	婁	昂

七 日 參、鬼、星、翼、角、房、箕、女、危、奎、胃、畢、  
八 日 井、柳、張、軫、亢、心、斗、虛、室、婁、昴、觜、  
九 日 鬼、星、翼、角、氏、尾、女、危、壁、胃、畢、參、  
十 日 柳、張、軫、亢、房、箕、虛、室、奎、昴、觜、井、  
十一日 星、翼、角、氏、心、斗、危、壁、婁、畢、參、鬼、  
十二日 張、軫、亢、房、尾、女、室、奎、胃、觜、井、柳、  
十三日 翼、角、氏、心、箕、虛、壁、婁、昴、參、鬼、星、  
十四日 軫、亢、房、尾、斗、危、奎、胃、畢、井、柳、張、  
十五日 角、氏、心、箕、女、室、婁、昴、觜、鬼、星、翼、  
十六日 亢、房、尾、斗、虛、壁、胃、畢、參、柳、張、軫、  
十七日 氏、心、箕、女、危、奎、昴、觜、井、星、翼、角、  
十八日 房、尾、斗、虛、室、婁、畢、參、鬼、張、軫、亢、  
十九日 心、箕、女、危、壁、胃、觜、井、柳、翼、角、氏、  
二十日 尾、斗、虛、室、奎、昴、參、鬼、星、軫、亢、房、

（一）大阿闍梨云、灌頂を修する時、灌頂をなす大阿闍梨の前に、豫備修者即ち加行をなす日数の期間を示す。初開壇の初め、開壇するに自ら開く開壇と云ふ。不動の護摩に種々の不動の護摩あり。護摩を修するに、弘法大師の所作の祖師の法に對して行ふ。當會の灌頂開壇の日ない。

二十一日 箕、女、危、壁、婁、畢、井、柳、張、角、氏、心、  
二十二日 斗、虛、室、奎、胃、觜、鬼、星、翼、亢、祖、尾、  
二十三日 女、危、壁、婁、昴、參、柳、張、軫、氏、心、箕、  
二十四日 虛、室、奎、胃、畢、井、星、翼、角、房、尾、斗、  
二十五日 危、壁、婁、昴、觜、鬼、張、軫、亢、心、箕、女、  
二十六日 室、奎、胃、畢、參、柳、翼、角、氏、尾、斗、虛、  
二十七日 壁、婁、昴、觜、井、星、軫、亢、房、箕、女、危、  
二十八日 奎、胃、畢、參、鬼、張、角、氏、心、斗、虛、室、  
二十九日 婁、昴、觜、井、柳、翼、亢、房、尾、女、危、壁、  
三十日 胃、畢、參、鬼、星、軫、氏、心、箕、虛、室、奎、

（二）大阿闍梨并びに受者前行日數  
大阿闍梨、（三）初開壇の時は、（四）不動の護摩三七日、三時に勤修す。吉日を撰みて初夜より起首し、表白第二十二日の日中に結願す。毎日入堂沐浴等は常の如し。但し、（五）祖師の所作はなし、其の翌日より、當會の前日に至るまで、間斷なく毎日不動の法一

(一) 表白 前に註せり。

(二) 大師・尊師、大師は弘法大師、尊師は理源大師、即ち聖賢尊師なり。  
(三) 四度 眞言密教僧侶の必ず修すべき法にして、十入道法、金剛界法、胎藏界法、護摩法、念誦法、禪法、神供、灌頂の時諸鬼神に供養する法なり。

座之を勤む。但し初開壇の時には前行を用ふ、後後の開壇には前行に及ばざるなり。  
一 初度の受者の前行は、不動護摩供五十ヶ日、毎日三時に練行す、初夜より開白し、  
(一) 表白 第五十一日の日中に結願す、其の翌日より當會の前日に至て毎日不動の法一座之を勤むること大阿闍梨の如し。若し他國に於て前行を修する人は、其の道中に於て日に修すること一座、其の前日に至るまで間斷せざるなり。受者の前行は(三) 大師・尊師の所作は(三) 四度の時の如く之を勤むるなり。

- 一 重受の人の前行は、不動護摩供三七日(別に表あり) 白あり其の作法前と異ならざるなり。
- 一 (四) 神供は四度加行の如く、更に異なきなり。
- 一 受者前行の間に、誦誦の眞言等 別に在り兼ねて教示すべし。

糸縫作法

縫の字は瞿醯經には搓まに作る。經に云く、其の界道の繩は、童女をして搓ましめよ。云云 韻會に歌搓は搦なり、○又哥の韻は千可の切、集韻に邪なる良と。文今の義にあらず。正字通に云く、搓は倉多の切、音は礎、轉摩するなりと、即ち此の義なり。古徳の抄記には多く皆縫まに作る。縫は字通に云く、此私の切、音は雌、亂絲の良是れ亦た今の義

にあらず、縫と搓は音同じ、故に通用するか。

- 一 (一) 當日の二三ヶ日已前に、吉日を擇むで之を作すなり。
- 一 縫衆六人 五人は五色各各の下マシ縫なり、口決に云く、若し人數不足ならば、不縫衆の内に、其の堪能の人を捻り合せに兼ね用ふるなり。

一 其の當日の朝、大阿及縫衆、各澡浴し畢りて(三) 七條を着すべし。但し縫衆は五條袈裟を着るなり。

一 縫衆の内に、他流の人、及び(三) 未灌頂のものを交ふべからず、假令一同流の人たりとも、志氣疏末の人は此の會に入るべからず、是れ當流の掟なり。又縫衆は皆(四) 覆面を用ふべし。寂云く、(五) 五色の線を搓らしむること、此の法事の中に最も秘要となす慎ますんばあるべからず。今具さに疏を引て之を明さば、第十五ナ云く、次に須く縫イトを用ひて曼荼羅の位を定むべし。縫とは梵音には、名けて蘇ソ去咀マ縫と爲す、是れ衆徳を連持して、其をして散せざらしむ、故に縫と名くるなり。線に四種あり、謂く白・黃・赤・黒なり、更に一種を加ふ、謂く虚空色コウカクシキなり。虚空は能く一切の色像を念す、即ち是れ一切の色を具す。若し但だ空の色に依らば即ち是れ淺青センセイの色なり、草木の葉の色ハナの如

(一) 當日 灌頂開壇の日。

(二) 七條 七條の袈裟なり。

(三) 未灌頂 未だ灌頂を受けざるの人。  
(四) 覆面 灌頂の時受者に使用する覆面とは異にして、縫衆の鼻口の臭氣を除く爲めなり。  
(五) 五色の線 事記及び理記にありし金剛線をいふなり、五色の糸を以て搓らしむ故に五色の線といふ。

(二) 八戒 八齋戒  
なり、不殺生、不  
偷盜、不邪淫、不  
婬語、不飲酒、不  
膏油塗身、歌舞觀  
聽、高廣大床の八  
戒にして、沙彌の  
沙彌尼の持する戒  
なり。

(三) 障法 正法を  
障碍すること。

し、白は是れ信の義なり、黄は是れ精進なり、亦た是れ念なり、黒は是れ空なり、空  
の色は涅槃に同じ、慧とは是れ大空なり、大空は一切の相を具して相あることなし、  
故に一切の色となす。凡そ線を合する時は、若し一法に依るとは、當に別に曼荼羅  
を造るべし、寶瓶・香華・塗香・燈等、及び諸の飲食を安置して種種の供養を作せ。更に方法  
を問。然して後に童女をして之を合さしめよ。先づ爲めに(二)八戒を受け、新淨の衣を着  
し、香水をもて澡浴し、内外を清淨ならしむべし。壇の中に座して之を合す。線を合  
すの法は、先づ預め細き絲を作り、極めて均調ならしめ、大小緩急皆所を得しむ、又  
中間に斷續連接することを得ざるなり。又合す時は帛を以て口を掩ひ、一色の絲ご  
とに來去禪牒して、九絲と成さしめ、然して後に合して一縷と爲す。其の絲但だ一頭  
ありて屈禪するの中間に、一縷一色を接ぐことを得ず、凡て五色を合せて一繩と爲す  
なり。若し繩を合せて緩急細調はずんば、又心を盡して作るべし、明なれば即ち  
(三)障法を生じ、師を損し、亦弟子を損す。或は其をして狂亂等を發せしむ、慎ますんば  
あるべからず。文 私に謂く、童女は是れ三昧なり、三昧極めて均等調停なるに由りて、  
五力・五根を成ずることを得、此の根力に由りて、即ち能く衆行を連持するなり。更に第  
二

(二) 塗香 身を清  
淨にするなり。

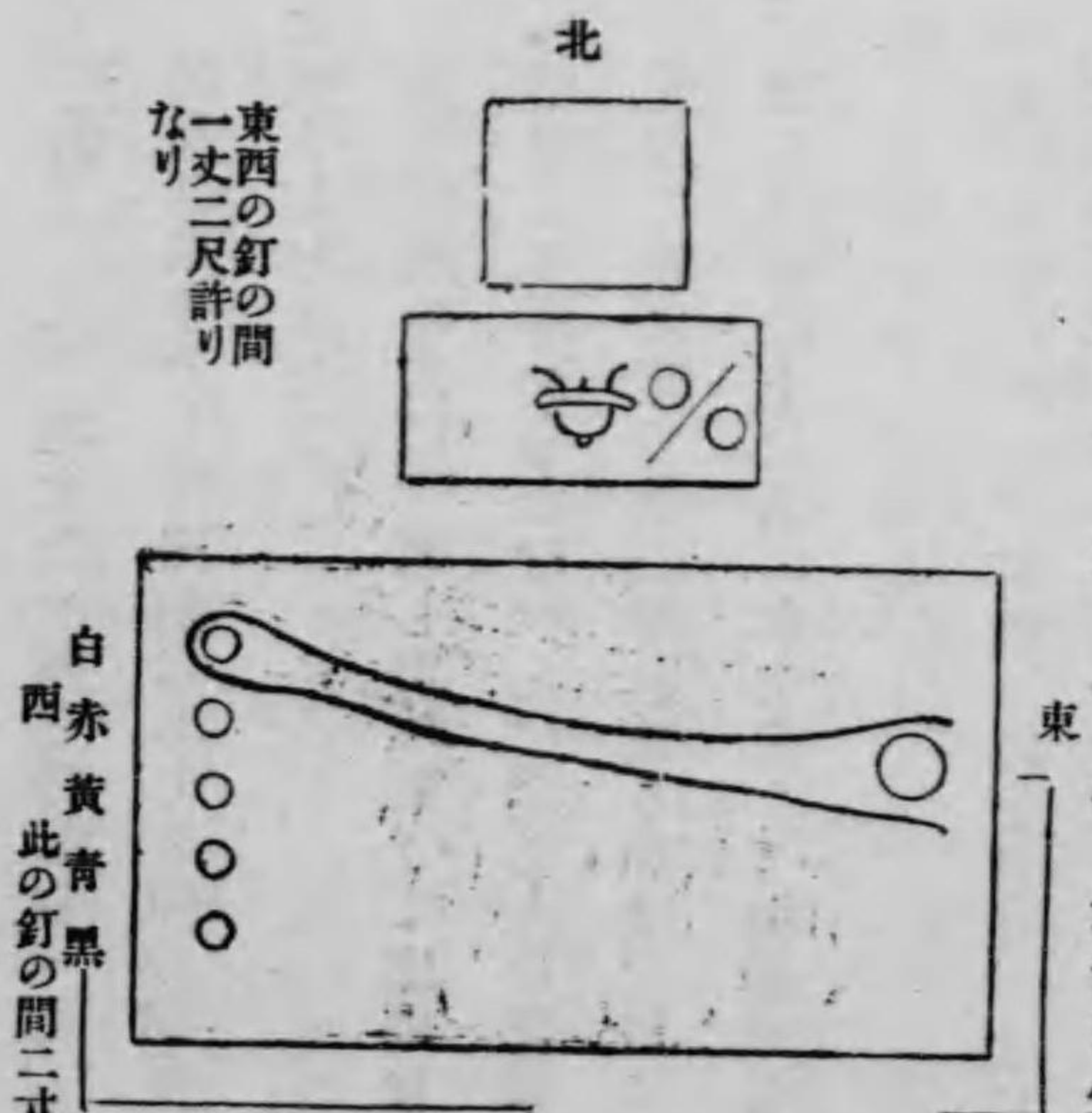
(三) 初會 受者多  
人數ある時は之を  
數組に分ちて灌頂  
す、その第一に灌  
頂するを初會とい  
ふ。

(三) 塗香・灑水等  
自下の名目は事記  
及び理記にあり。  
(四) 三部云云 理  
記に頭註せり。

十二廿云く、凡そ繩を合せ所を得しむべし、太だ緩くすることを得ず。若し調はずん  
ば、師及び弟子をして多病ならしめ障の爲めに燒さる、若し用ふる時に斷絶すれば損  
耗を致さしむるなり。  
一其の縫衆の内に、若し事故ありて道場を出で、或は他の事を作さば更に(二)塗香を  
與へ手をして淨からしむべし。若し大小便には必ず澡浴すべし。  
一受者の數に隨て幾の線を縫る時は、初に縫る所を以て(三)初會の正受者の料とな  
し、即ち包紙の上に其の名を記して相濫せしむることなかれ。一一の受者も其の胸次  
に隨て皆此の如くすべし。

一大阿闍梨の座は、半疊一枚を設け、北に在りて南に向ふ、其の前に机一脚に、(三)  
塗香・灑水・散杖・火舎・香煙を名香・等之を置く。縫衆は皆北に向て座す。次に大阿、塗  
香を取りて縫衆に與へ、自も亦塗香すること常の如し。次に大阿、縫衆まで各(四)三部  
・被甲護身・常の如し。次に、大阿、灑水水き加持等常の如し。五色の絲及び自身と縫衆とに三度之を  
洒ぐ。其の糸は兼日雙に移し開加折敷に之を居て机の前に置くべし。衆、座を起て絲を縫るなり。  
一糸を經る時は、經る人は南に在りて北に向ひ、先づ白色の糸を篋の穴に散杖をサ

シテ、先き上りに之を持ち、東方を糸の本となし、白色を初となして、東方の大釘に引サキ紙を付け、其の上にかたワナに之を掛けて東より西に轉じて、篋を持って往還すること九遍斗り轉じて、經始めのワナと、捻り合せて之を留む、糸の龜細に依りて經る數は不定なれども、多分は一方九筋、双方合して十八筋にして大形は程能きなり。次に赤・黄・青・黒・皆此の如く經る也。但し赤色は少し細くすべし。等分なれば糸赤過るなり。



一東の大釘は此の釘なり、此の釘に經始めの時一色毎に引サキ紙を間だに入れ總じて五筋なり、糸の本を持つる人は此の紙をシカミ之を持つなり。  
 四方の五本の釘は此の釘なり、此の釘に引サキ紙を付けて糸を經カクル故に此の所ワナに成る、是を糸の末さいふ、經終りて此の引サキ紙を持って立て揉るなり

一經畢りて將に下縫せんとする時に、大阿に案内を申す、其の時に大阿、五人の經衆に五佛の眞言を授く。印は結ばざるなり

- 白色には 大日眞言 歸命 天鼓音眞言
- 赤色には 寶幢眞言 歸命 天鼓音眞言
- 黄色には 開敷華眞言 歸命 天鼓音眞言
- 青色には 無量壽眞言 歸命 天鼓音眞言
- 黒色には 天鼓音眞言 歸命 天鼓音眞言

其の縫る間には各々眞言を誦しながら之を縫るなり。

次に大阿闍梨は、其の縫る間には、五色各別に五佛の印言を結びて之を加持す。

- 白色(大日) 外五股印 眞言前の如し。三反
- 赤色(寶幢) 蓮合、二地・二風舒べ散じ、二空並べ立て、二水立て合す、眞言前の如し。三反
- 黄色(開敷花) 蓮合、二風輪屈して空の上に在り、二地開立す、眞言前の如し。三反
- 青色(無量壽) 八葉印、眞言前の如し。三反
- 黒色(天鼓音) 蓮合、雙地を屈して満月に入る。眞言前の如し。三反

(一) 外五股印 前  
 (二) 蓮合 蓮華合  
 (三) 八葉印 八葉蓮花の形を表したる印なり

（二）蹲踞略して  
尊居と書く時あり  
蹲り坐するをい  
ふ。

一其の正しく繕る時は、初に黒色を繕る人、先づ糸を抜き取りて南へ退き、北に向  
て（二）蹲踞し、呪を誦して之を繕るなり。次に青、次に黄等も皆亦此の如し、其の繕り  
様は、右の手を上になし、左の手を下に爲して、右の手を内へ引き我身の方なり左の手を外  
へ遣りて之を繕るなり。その糸（一）繕りチマル時は、五本の釘を引き抜き一尺一二寸許  
り、東へ寄せて打ち直す、抜けざる様に能く念を入れてサスべし、一尺一二寸とあれ  
ども、一尺三四寸も繕りチマルレバ、糸能く繕れて、捻り合せの時に宜きなり。五人  
の糸長短なく繕り締め畢りて、紙に水を少し浸して、糸の末より（四）本に之きて（東）方軽く  
摺りて、糸のシナを能く調へ其の後に捻り合するなり。その繕（三）縮まるとは、一丈二尺  
計り經て九尺繕り縮むるなり。（金）尺  
一下繕り調べ了らば、先づ板中妹に入る、板中妹に東西の書付あり、東方は白・赤・黄・  
青・黒右へ順に廻るなり。其の書付の如く、白より順廻しに次第に之を入る、入れ了り  
て二三尺計り東方へ押し遣りて、次に五つの糸口をソロヘテ、又長中妹を入れて、太  
き方を西に向へ、其の書付の如く、糸を五の刻（五）の間に入るなり。  
一捻り合せは三人なり、一人は捻り合するなり。（佛）部西方の五つの糸口を一にして之を

（二）第二重印可  
即ち法の許可につ  
き重なりて、第  
一重を受けても、第  
二重第三の重位あ  
り。

（三）劔印云云  
動明王の所持の劔  
の標示の印、慈救  
呪にして、南無（歸  
命）三受多（普通）  
持曰羅般（諸金剛）  
戰怒（暴惡）摩訶  
（大忿怒）薩破託  
也（破障）呼（恐怖）  
恒羅他（堅固）憐給  
（種子）。

繕り、秘密の明を誦し、蹲踞して之を繕る、捻り合せの時は右の手を外へ遣り、左の  
手を内へ引きて之を繕るなり。口決に云く、若し未だ（二）第二重の印可を受けざる人  
は之を授くべからず。但大阿の捻り合せ加持計りなり、一人は蓮部、左の手に長が中媒  
を持ち、右の手を以て五色の糸の並（一）の亂れざる様に持ちソフルなり。又左の手にて捻  
り合せ、白糸を中へヒチリコム様にして、繕りに隨て次第に中妹を東へ引て往くなり。  
今一人は部板中妹を持ちて糸のシナを能く直し、次第に東へ引て往くなり。二人共に  
北に向ひ蹲踞して往くなり。東の釘の本まで繕りツメテ釘を抜き、中妹を去りて繕り  
終るなり。糸の本をば方白色の糸にて之を結び、糸の末をば方赤色の糸にて之を結  
ぶ、結び已りて糸の端をば之を切るなり、本糸を切るべからず。若し糸の端に入ら  
らば、短きをば引きノバシ長キヲバ押しコンデ、能くソロヘテ之を結ぶなり。而して  
後に其の糸を四方へ引き張りて二三反（三）引きシメテ糸を能くノスなり。次に糸の本を取  
りて念珠をワタル様に本より末に至りて、左の手の四指に纏ひワケテ其の後大阿の前  
の机の上に之を置くなり。

一捻り合せ畢らば、大阿捻加持は、不動の（三）劔印、慈救の呪、劔印の側を糸に當つ



るが如くして、之を加持すること百八遍、順逆の義無きなり。

(二)末資 後世の弟子の意。

一受者の線縫り畢りて、上げ巻きに之を結ぶ。絶具に云く、先づ大阿闍梨、或は教授之を結べ、若は縫衆の中にも、達者の仁に仰せて之を結ばしむ。先づ捻り糸を引き合せし真中より二つに折る、長短あるべからず折目より三寸四五分ヲイテ、上げ巻に之を結び、上げ巻の兩輪一寸四五分之を出し、又三寸五分ヲイテ、追ひ回しと云ふ物に一結して後、又三寸四五分量りて上げ巻に之を結ぶこと前の如し、捻り残りの二筋を、初の折目の中へ二筋ナカラ引き通して、一結び引き結びて之を置くべし、古き糸之を見るべし。予に賜る線は此の如し、マツレ末資此の旨を守るべきのみ、結び畢りて紙に裏で大阿闍梨へ進むる也。

一大壇の糸は、絶具に金台兩界の糸と、并びに加持の作法とを出し、具に之を出す、是れ三兩壇構の時の作法なり。當時は只一壇構なるが故に、金界の糸は一向之を用ふることなし、胎藏は色法を本となす故に、一壇の時は胎藏の糸を用ふるなり。花形壇に引く時も、胎の様之を引くなり。絶具に云く、胎藏界の糸の事、所作加持は受者の糸に同じ。師傳に云く、色法とは胎藏を以て本となすが故に、四壇共に胎の糸を以て通し用ふる事は常なり。然りと雖も兩壇灌頂執行の時は、一時に糸縫等之れあるも

(三)兩壇構 金剛界と胎藏界につき各各に壇構をへるを兩壇と稱し、金胎兩界を一壇とすといふ。

のなり、尤も各別の沙汰に及ぶべし、至て用なり。云云一大壇の糸は四十目計りなり、一色は八文目アマリなり、四丈四尺計りにて續紙四丈四尺たるべきが、五色各別に縫る時四五尺も縫むべきが三丈四五尺に縫り立つるなり。鳥口には糸の末の方を付けて巻くなり、楸に引き初むる方は糸の本なり、加持の作法は受者の糸に同じ。已上

アカマツナハカ 關伽水作法

(一)關伽井 關伽井の義にて關伽の水を汲む井戸なり。

(二)關伽棚 關伽水を汲み置く棚なり。

(三)初後夜の水 初夜即金剛界後夜即胎藏界に使用する關伽水なり。

(四)五瓶 事記にあり。

或記三寶院に云く、上代は受者と大阿と、關伽井に至て、二桶水を汲みて關伽井の所にて、大阿之を加持し、其後に受者に之を持たしめて坊に歸る。近代は然らず、只承仕一人、關伽井の所に至りて水を汲み、三關伽棚の邊に之を置く、教授若は阿闍梨、關伽棚の邊に至りて之を加持するなり。先師記に云く、當山には水無きが故に、遠く般若河の水を汲む、故に承仕及び下邊をして之を汲ましめ、清淨の桶を二つ用意して、關伽桶を其の中に指し入れて荷ひ持つなり。汲み來りて後、關伽棚に於きながら之を加持す、加持し已りて後、三初後夜の水を混亂すべからず、仍て初夜の水には櫛一房之を入れ、并びに杓を加へて以て覺となす。其の後夜の水は四五瓶の水を入れ訖るま

(一) 發願 諸願を  
 發すことにて、  
 請に於ても、  
 句に於ても、  
 是發願の意あり。  
 (二) 軍茶利 小呪百遍。  
 軍茶利王にして、  
 小呪は阿密囉帝呼  
 五大明王の一なり。  
 發呪は又吉里吉  
 里の呪なり。  
 (三) 五瓶加持 灌  
 頂の時、大壇に盛  
 ふる五瓶に水を備  
 り、之を佛の三味  
 さなす加持にて、  
 此を受者の頂に灌

六二〇  
 では、闕伽棚に置きて杓を加承仕等に能能仰せて、初夜の方に用ふべからず。三摩耶戒  
 の灑水・闕伽等にも、皆初夜の水を用ふべし。他流には闕伽桶に金胎と書き付けること  
 之れあり、當流には此の義なし。その加持の作法は、  
 先づ護身法。次に(一)發願金剛合掌。

至心發願 水神勸請 護持受者 悉地圓滿  
 次に一古を以て(二)も、加持、各廿一遍。次に(三)軍茶利小呪百遍。次に水天眞言  
 百遍。唵囉嚩擊野娑婆訶。二桶を一度に立ち乍ら闕伽棚に於て之を加持するなり。  
 其の闕伽桶は前日水を入れて漏らざるや否やを檢ふべし是れ故實なり。  
 朝の作法。

絶具に云く、弘濟法印の記に云く、(四)五瓶加持は當流には、朝の作法と稱し。仁  
 和には、調支具の作法と云ふなり。文 又或記に(三)寶云く、調支分又は調支具と云ひ、廣  
 の記の説に依らば、小野にも亦調支具と云ふ。但し調の字の聲を以て分別を爲すなり。  
 口決に云く當日の後夜(寅)に之を作す。先師云く、當山は齋食の故に小食已後に之を作す五寶・五穀等、皆名香包の  
 如し、五種各別に包み、其の五種を又捻包して置くべきなり。此等の事は皆教授の沙

汰なり、兼て用意すべし、其の作法の時に遅遅すべからず。

兼て用意すべき諸具。

- 一瓶十口 丸折敷 九折敷に居ゆるなり 一角の五色造花十本 角折敷に居ゆるなり 但し一會分なり 一絲帛三尺五寸一會分
- 一白練糸 枝木 筋料 一角の小折敷 一枚 一燭臺、手燭 蠟燭を添ふ
- 一半疊二枚 一香藥 金銀の薄は別 甘裏に之を包む 甘裏 一枚 一裁板 一枚
- 一定木一本 一小刀二丁 一竹箸四本 一机一脚 一火舎 一器

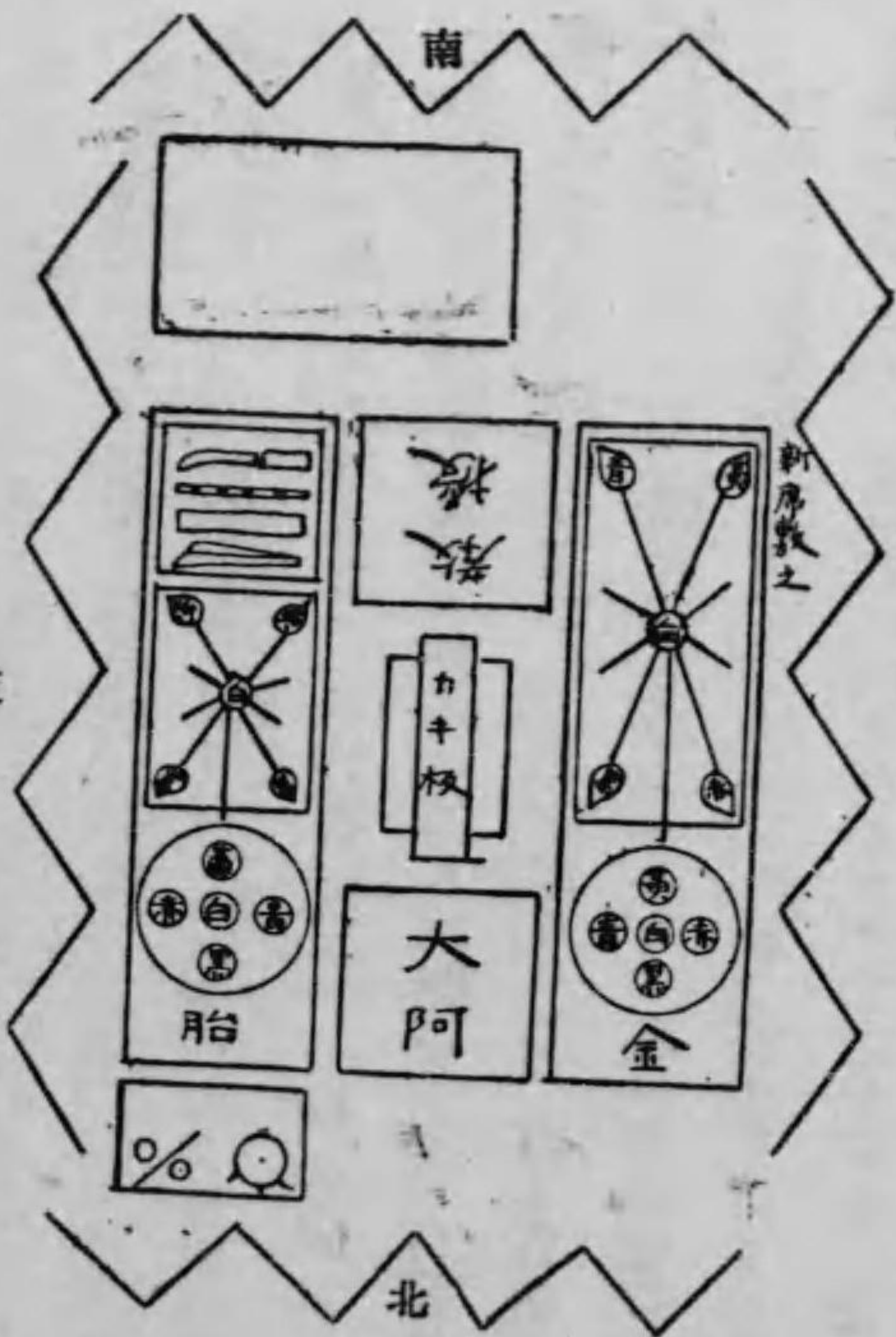
一其の作法は但是れ大阿と教授の二人の沙汰なり。口決に云く、若し受者多き時は遅  
 遅に及ぶ故に、助法の人あれども亦爾るべし。若し當流の傳授を遂げて、能く故實を  
 知る人は勿論なり。假使ひ初心なりとも、灌頂部の傳授を遂ぐる人は之を用ふべし。  
 一五色の造花は、其の莖の根を三所程、紙捻を以てシカシカトク、リ、水のシマザ  
 ル様に之を認む、其の莖の根を水をかけて之を淨む、是れ洗ひ淨ムルの意なり。  
 一絲帛は一會分、生絹三尺五寸 周金尺 是を五色に染め、一色分各七寸なり。  
 一其の作法の處は屏風を以て之を圍み、大阿は北に居し、教授は南に居す、各半疊  
 を敷き、其の兩方に各新なる蓆を敷き、其の上五瓶等の諸具を置くなり。五瓶は

(二) 五色造花 蓮  
 花なり。

丸折敷に居へ、造花は角折敷に居ゆるなり。又小折敷に小刀・周尺・綵帛・香藥之等を置く、又小机の上に塗香・灑水・散杖・之を置く。

一大阿・教授着座し了りて、教授白絹を取り出し、大阿小刀を以て其の端を切り捨つ、

次に兩人尺を以てサシて一寸ヅ、に折目を付けて四つに切り、其片端一寸計り残して、真中をニヅ、裁ち切る其の圖は



れ此の四つ切は、金・胎・中瓶の綵帛なり。次に又二寸

に折目を付けて一つ之を切り、是を二寸四方に三つ之を切り、二つは金・胎中央の香藥包、其の一つは護摩の香藥包なり。又一寸に折目を付けて是を三つに裁ち分けて、

之を捻りてワナムスビにして、香藥包の口を結ぶなり。護摩の香藥は常の紙捻りにて真結にして、其の端はフツと之を切るなり、其の餘の四色の裁ち様も皆亦此の如し。但し四色の二寸四方の絹は只だニヅ、なり。護摩の料は入らざるなり、其の次第は赤・黄・青・黒の次第に之を裁つなり。

(二) 綵帛 護頂の時に大壇五瓶に懸くる絹なり。

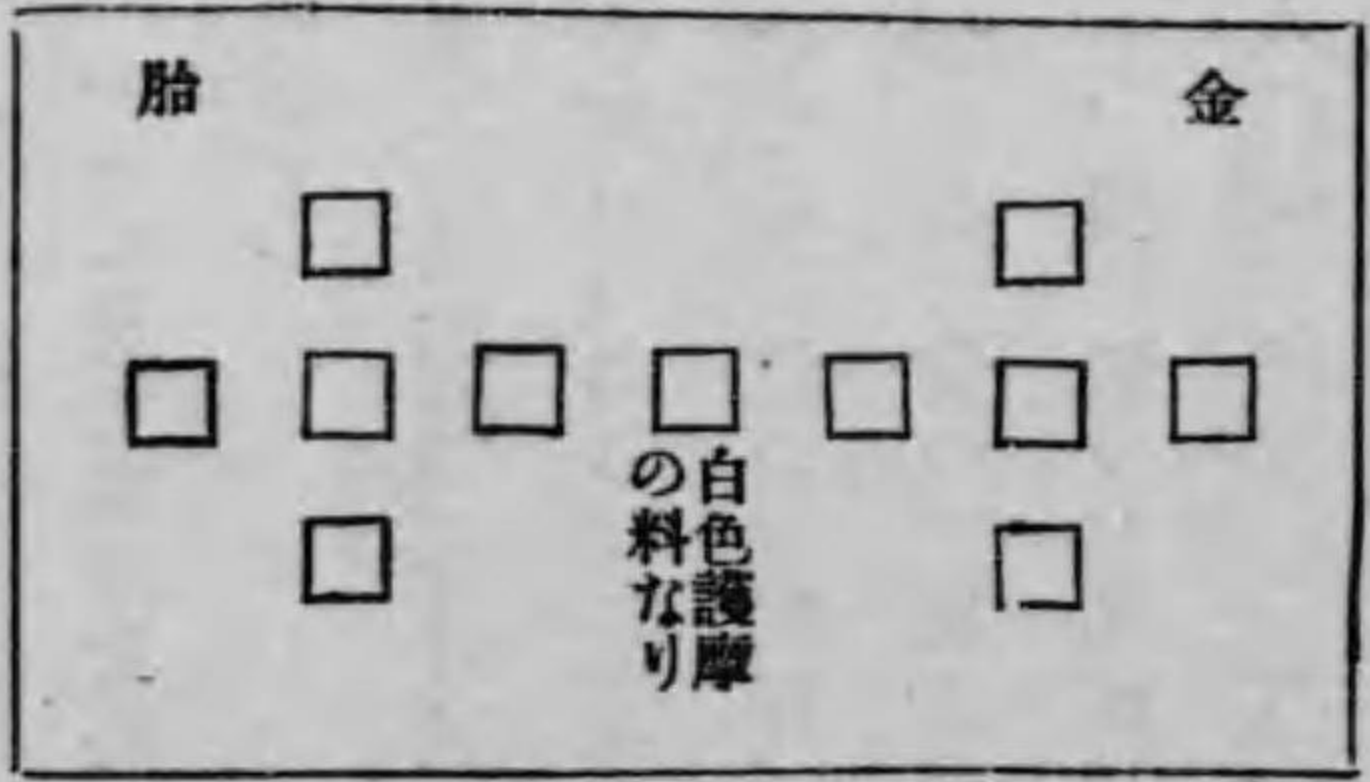
次に(二)綵帛の絹を結び合すべし。口結びの絹、又捻り置く可き也

若し助法の人あらば、當に此等の事を爲さしむべきなり。次にカキ板を除きて

折敷の上に彼の二寸四

し餘分あらば則ち十瓶の香藥へ配分して皆之に入るなり。次に真珠を進む、大阿之を取り、一粒ヅ、之を置く、但し護摩壇は二粒之を置く、瑠璃も之に同じ。次に(三)五香・五藥等次第に之を進め、少しヅ、取りて之を置くなり、是の如く置き已りて、次に捻り

(三) 五香云云 五香は沉香、白檀、紫檀、五寶、天竺、木、五藥とは、赤、朱砂、雄黄の五藥をいふ。



此の圖は實に記述に出づ。雄宥の口の決りなり。

此の如く並べ畢りて、次に教授、先づ金薄を進め、金薄五枚をカキ板の上に置きて、一度に四つに切りて、一ツ、十一の絹の上に之を置く。先づ金、次に胎、次に護摩の次第なり。次に銀薄を進む、作法前に同じ、若

絹を取りて、眞結ひにして香藥をククツて其餘を之を以て瓶の頸に結び付けて香藥を瓶の中へ之を入るゝなり。次に教授、五瓶を持って闍伽棚に往きて、金の水を金の瓶に入れ、胎の水を胎の瓶に入る。但し其の水、瓶の口に餘る程には之を入るべからず、是れ師傳なり。次に大阿の前に於て綵帛を莊り、造花を立て正方に之を置く、金は白、赤・黄・青・黒、而して後教授退出す。

次に五瓶加持、先づ金の五瓶加持、金の五佛の印言。

中央大日 二手外縛して二中劔形の如し、二頭を二中の背に附く加持四處眞言、唵囉曰羅駄都鏤

東方阿闍外縛二中立て合せて心に當つ、眞言、唵惡乞菟合毘也吽

南方寶生外縛二中寶形の如く額に當つ、眞言、唵囉恒曩三三婆嚩但落二

西方無量外縛二中蓮の如し、喉に當つ、眞言、唵盧計濕囉囉、囉惹紇哩合

北方不空成外縛二中掌に入れ面を合せ、二大二小立て合せて頂に當つ。眞言、唵阿目引

加悉弟惡。  
次に(一)辨事加持、(二)降三世印言大印大呪、順逆五所常の如し、次に念珠を取る、五佛の眞言並びに降三世の大呪、各百八遍之を誦し、造花・綵帛。

(一)辨事 前に註  
(二)降三世 降三世  
世明王にして、降三世  
は左右の二手各指  
剛拳にして、頭指  
剛拳にして、頭指  
結す、言は常に蘇  
小呪にして蘇婆你  
蘇婆你縛曰羅囉  
吒といふ。

香藥等を悉く之を加持すと觀念すべし。

次に胎の五佛の印言を結誦し、胎の瓶を加持す。

中央大日 外五股印、歸命阿尾羅吽欠。

東方寶幢蓮合、二地と二風と舒べ散じ、二空を並べ立て、二水と二火と立て合す。歸命

南方開敷蓮合、二風指屈して空の上にあり、二地開き立つ。歸命

西方彌陀八葉印。歸命

北方鼓音蓮合して、雙地を屈して満月に入るなり。歸命

次に辨事加持、不動印言、觀印、慈救の呪、順逆五處等常の如し

次に胎五佛眞言、慈救の呪、各百八遍之を誦し、綵帛・香・藥等を加持し、受者の悉

地成就の由、之を觀念すべし。

(一)齒木 事、理  
二記及び要秘鈔に  
あり。

(一)齒木 飾り様

其削り様及び糸の莊り様等。具に絶具抄の如し、五葉櫛の柳の葉の如くスベヨ

國譯傳法灌頂諸作法私記

キを、前日より之を用意し、少し日に乾し、シナくトシタル糖を用ふ可し、葉のコ  
ハキハ折て巻きニクシ、教授其の意得あるべきなり。莊り糸色五尺或記に四尺許りと。  
云四尺にては短なり。糸の倉細見合せて飾るべし、別に加持なし、紙に包み戒體箱に  
受者の枝木  
入れ置くなり。

受者の枝木



入れ置くなり。

莊り枝木



此處は平に切るなり

タク前廣には調ふべからざる事なり。

口決に云く當日の朝飾る可  
し、是れ如法なり。惣じて  
造花・張佛供・等の支具、イ

(二) 鎮守讀經作法

(二) 鎮守云云  
頂の時、その寺の  
守護神に法樂を捧  
げ加護を求むる爲  
めに法用するをい  
ふ。

一當日辰の一點、拜殿に於て之を行す。

一壘色衆座、及び受者座、一壘一張

一前机 一脚 六器は常の如し、  
但し鈴杵之れ無し

一脇机・塗香・灑水・散杖・柄香呂・之れあり。

一磬臺 一禮盤 一燈臺 四本 大ニ 小ニ

一足打 三前 各土器に洗米を盛り之を備ふ、今度略の故に壘一の  
シシベリシユケウ 上に土器三を居て、前の机上に置きて之を備ふ。

一新摺理趣經、必ず新に摺るべし、經數は色衆の數に隨ふ不同なり

若し六人ならば六卷なり、壘に載せて之を置く。

一幣 三本 會會に之を改む。

實紹記に云く、幣串は竹二本宛並べて、三所紙捻りにて結び合せ眞結にするなり。串  
の長さは不定、處に依る可きなり。紙五枚重ねて先づ眞中より二つ折り五つに切るな  
り、奥の一は劔形にして挿む處にするなり、是は紙の折り返しの方なり、爾れば四タ  
レに成るなり、一本に二枚宛なり、幣串二本の間にサシハサムなり。

串の拵らへ様は、告竹の新きを切りて、皮を節の本より一寸餘り置きて切り廻し、跡先  
をツマヘタルなり。云云 口決に、塚上ホトリに生じたる竹は用ゆべからず、生竹の色青  
きを節をソロヘテ、假令ひ三會ならば、一度にコシラヘ置く可きなり。

一華籠机 一脚

一華座具あり、其數は衆數に隨て不定なり。



受者成亥の角より入るとは。

受者座を起ち、壁代の内に入ることを明す。此は

南向の堂に約するが故に、高座の東を經等と云ふ。謂く成亥の角を入口と爲し、成亥の角より入りて、高座の後を經。次に東方を經て禮盤の前に至るなり。文永記には、高座の北を經等と云ふ。此は東向に約す、東向の時は未申を入口と爲す、此れより高座の後を經、次に北を經て禮盤の前に至るなり。禮盤の前に至り畢りて、先づ蹲踞して扇を禮盤と磬臺との間に置き、香呂カウロを持て三禮し、禮了りて香呂及び三衣袋を前机に置く、獨古トコと念珠とは尙ほ手に在り、少し後に草鞋ソウカイを脱きて禮盤に登るなり。同壇の受者は直ちに正受の後を通して南方に至り、正受と同じく三禮す。禮了りて先づ蹲踞して草鞋を脱ぎ、半疊の上に坐し、次に扇を開きて其の上に香呂と三衣袋とを置くなり。

次に金二打とは。

口決に云く、大阿之を示すなり。受者神分等とは、近代は

此の義なし。但し無作法の時は、金二打して直に勸請の頌を讀むなり。一説に無作法の時は一向に金を打たざるなり。

次に大阿ニ說戒了り等とは。

灑水シヤスイより大悲護念成善願に至るまで、大阿の所作皆悉了るなり。その大悲護念句の時、大阿ニ如意ニを置くに聲あらしむ。教授之を聞

（一）說戒 大阿開  
梨の受者に對して  
三摩耶戒を説きた  
るなり。  
（二）如意 前に出  
す。

て起座して壁代に入るなり。

此の時教授壁代に入り、禮盤の東邊とは。

今は東向の故に禮盤の北に至り、磬臺

を取り去り、便宜の處に置き、禮盤の北に於て蹲踞して大阿の命を承りて進退する也。

此等の供具取り傳ふ時等とは。

大阿右の手の大・頭・中・の三指を以て器を持

て之を教授に渡す、教授左の手を捧げて之を受け、次に右の手の大・頭・中・の三指を以て、之を持て受者に與ふ、受者は兩掌を開きて之を受けて頂戴し、次に傍受者に與ふ、前の如く頂戴せしむ、一一の受者皆是の如く了りて、初の如く次第に之を返して正受者に止まる。其の時教授、器を取りて右の掌に置いて、之を大阿に奉る、大阿之を取りて本所に置くなり。

三種物取り寄せ、壁代より少し指し出す等とは。

此は三種の物を壁代の外に

設け置く時の義なり。近來は初より前机の下に入れ置くが故に、期に臨んで教授自ら取り出す、十弟子の持ち來るを用ゐざるなり。

次に（一）支木等。

此の時に大阿、戒體箱より齒木を取り出し、加持する等の作法

之れあるなり。此の時を指して、此間受者退下等と云ふなり。

（一）支木 支木は  
齒木と同意に用ふ

此間受者禮盤を退下す等とは。口決に云く、教授は掠手洗取に起つ時に、受者下禮盤して草鞋を履き、禮盤の前に蹲踞して之に居るべきの由示す可し、其の掠等は禮盤の東北寄りに置く可きなり。

教授三種物を取り寄す等とは。受者下禮盤し了りて、教授薦を禮盤の上に敷くなり。三折とは。此に二説あり、其の圖曰此の如し、具さに文永記の如し、三折にして切口を東西に向けて之を敷く、今は東向の故、南要を以て之を言は、北に之を敷くなり切口は受者の左右に成る様に敷くなり、之を敷き了りて教授は禮盤の東の邊に今は北の蹲踞せよ。

私に云く、右手金剛拳に作る等とは。楊枝ヤウジを持する印相を明すなり。但し細き根を大指の方、太き末を小指の方にして之を持す、餘は印文の如し。

註に一定細き方とは。細き方は是れ根なり、煩惱の根本を嚼み摧くの標相なり。疏の第五に云く、三世無障礙智調伏の牙を以て諸煩惱を噬かぎ竟る。文文永記に云く、覺洞院と並びに遍知院とは皆齧き方を嚼ましむ、但し遍知院は近年より本文に任せて、細き方を嚼ましむる故に、又故の大僧都の口決に重ねて之を尋ぬるに一定細き方なり。云云寂云く、細き方は木の根抵なるが故に、後の口説寂も經疏の本文に契へり。

次に枝木の嚼みたる方は之を洗ふとは。口決に云く、洗ふ時に印を解かず、

印を以て之を持し、左の頭指と大指を以て之を洗ふなり。洗ふ時に掠等は禮盤の北、教授と受者との間に之を置く、教授は水を掛け受者は之を洗ふ。

次に枝木を投す等とは。教授右の手を以て受者の印の手を握りて之を指さしむるなり。

私云く、枝木のフトキ方を受者の身に向く等とは。實紹記に云く、右の手の

掌をウツムケテ、齧き方を身に向く様に指すべきなり。先師記に云く、教授右の手を以て受者の手を取り、押し返して細き方を下にして、太き方を受者に向けて、トクと薦の上にサ、シムルなり。文此等の説は大日の疏及び本式の文に違す、今具さに文を引きて之を明さん。本式に云く、次に香水を以て嚼める頭を洗ふ、其の木を把きる法は、右の手拳を作り、地風に申べて齒木を取り、東若は北に向て蹲踞し、其の嚼める端をして外に向はしむるは不成就なり、身に向ふは成就なり。若し遠く投げ却り來て身近づけば、是れ久しからずして成就するの相なり。若し首ら直く立て、上に向は、成就す、若し下に向かは是の人は當に修羅・龍宮に入るべし。擲なるに空中に在るは、當に



知るべし、此の人は先に已に成就せるなり、北方と東方とに向ふを上成就と爲し、西方を中成就となし、南方を下成就となす。又此の文は疏第五卷に依る、疏の文往て閱よ。此の本文は、明らけし太き方は受者の身に向かば是れ不成就の相なり。疏に嚼む處外に向くと云はば、是の如く之を作す時は、則ち太き方は身に向くなり。若し爾らば大僧都、文を解すること偶々誤れり、本式に隨て細き方を身に向ふべきのみ。



\*受者禮盤の前に來りて、前の如く作法するなり作法畢りて座に歸る。次に正受者亦登禮盤するなり。

云く又授式は只一人に約す若し同壇あらば、正受者の作法畢りて、且く壁代の南西の角に寄せて尊屈す。次に傍とは。一の口説に云く、三種の物を持ち、本の如く前机の下に入るなり。此條は等とは。此の本文の如く、則ち大阿登禮盤と示す。教授は示さざるなり。次に金剛線の作法文の如し。

次に金剛水等。其の取り傳へ様等は具に三昧耶戒記の如し。

次に受者退下等とは。皆三昧耶戒記の如し。

初夜作法

私に云く、振鈴の後暫く等とは。口決に云く、振鈴はイタク早きなり、正念誦の比座を起て後戸より入る、引入口より入るべからず。中觀の記に云く、又教授入道場の時刻、其の分齊を相計りて入るべし、振鈴程も争早きなり。寂云く、今道場ならば、切戸より入りて、内庫の障子の外に居て、時分を待つべし。

(一)散念誦の後等とは、禮盤等を他所に移す等。具に初夜の記の如し。

次に教授師等とは。五瓶行道を明す。本方に違はずとは、初夜の瓶は白・青・黄・赤・黒の次第なり、此の次第に違せず、小壇の脇机の上に移し、中白東青南黄西赤北黒次第に之を置く、故に本方に違せずといふ、是れ正方なり。

私に云く、先づ正面等とは。文永記に云く、師の云く、先づ正面に蹲踞して、

大日印言七反之を行す、中瓶の花を抜き、其跡に置き、右に繞ること三匝順小壇に置き、自餘の四角の瓶は各々角に蹲踞して印を結び言を誦して之を取る、初後夜俱に胎藏の

(二)散念誦 前に 註す。

印言を用ゆ。文而るに今の授式には印言を結誦することなし。此の義如何、答ふ。中観の記には、此の二説を擧げて取捨の辨なし。教舜の記には印言を用ふること即ち文永の記と同じ、知んぬ幸心方には印言を用ふることを。當流の所傳は但だ授式の如く、花瓶を取る時には印言を用ひざるなり。實紹記に云く、五瓶を小壇所に移す時、當流には花瓶を取る時に、五瓶各別の印言を用ひざるなり。行道の時は、五佛共に一印なり。持花の印明は各々に別なり。式の如し。

花をヌキテ本處に置くとは。

此の二説あり。

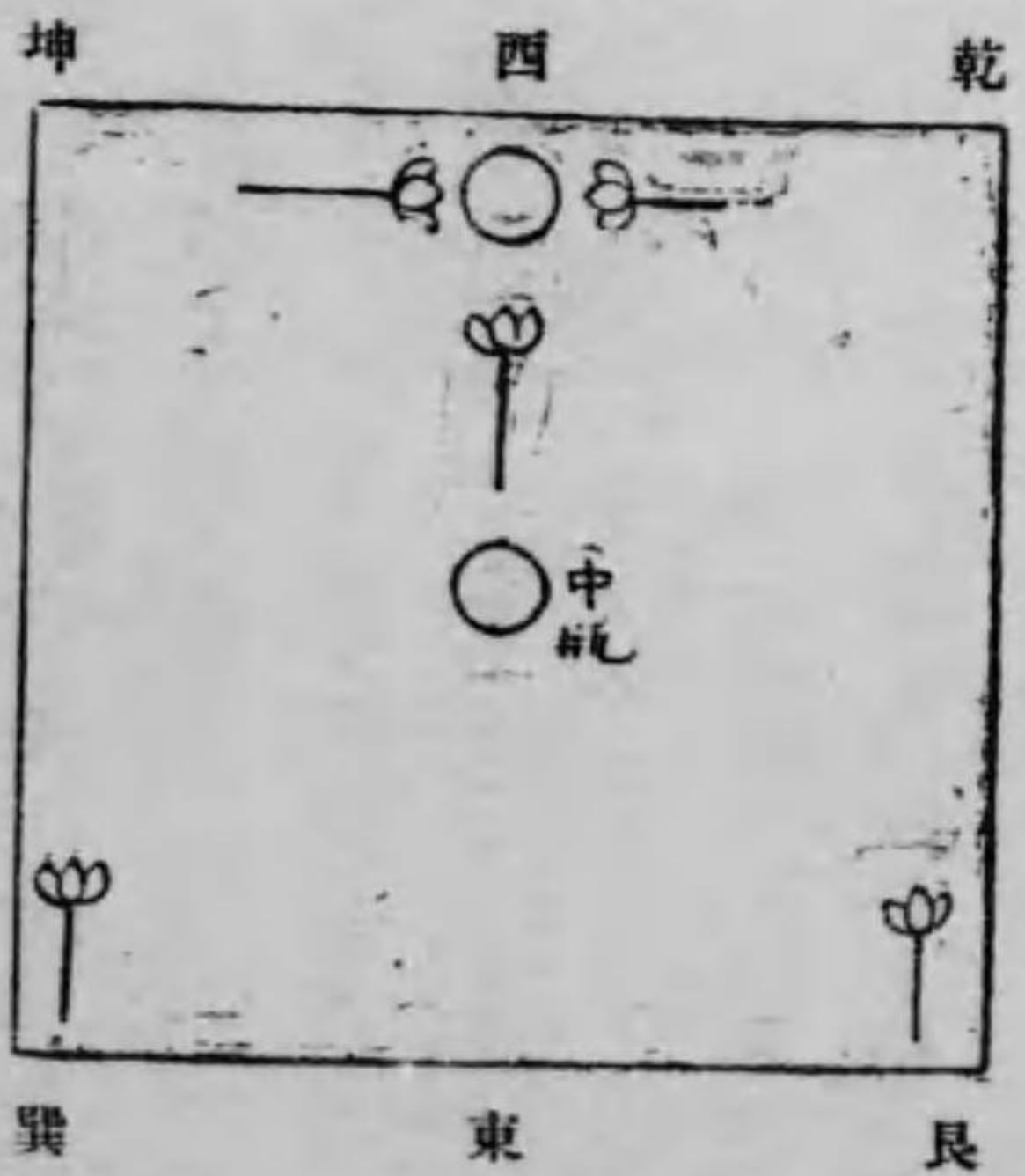
文永記に云く、遍

口に云く、五瓶は

各々花を抜きて、

本の處に置く。

空地に置くなり、又一説には



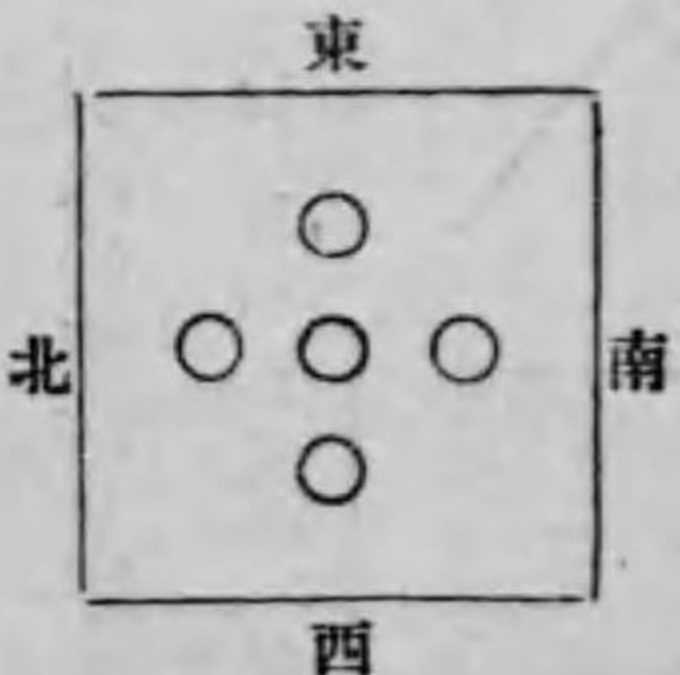
前の火舎の後に之を置く。云云。口決に云く、花を抜いて能く水をタラシテ向ひの火舎と中瓶との間に置くなり。圖を出して云く。(上圖なり)

取り様は右手等とは。

謂く右の手を以て五色の下より指し入れて、持花の印を以

て花瓶の頸を取り、漸くに引出して左手を以て之を承けて、胸の前に捧げて壇前に於て一揖して次に行道するなり。

中瓶白色等とは。中瓶の眞言を出すなり。丑寅瓶等とは、已下の四瓶の眞言を出す。先づ教授、丑寅の角に至り、壇の前の如く蹲踞して青色の花を抜き、能く水をタラシテ花の頭を西に向けて、敷曼荼羅の北の端に之を置くなり。次に辰巳に至り、壇の前の南黄色の花を抜き、花の頭を西に向けて南の端に置くなり。次に未申に至る、壇の南の西、赤色の花を抜き、花の頭を北に向けて西の端に置くなり。次に戌亥に至る、壇の北の西、黒色の花を抜き、花の頭を南に向けて西の端に置くなり。此の如く各各に眞言を誦して行道し畢りて、小壇所に至りて、中の花を中央に置き、艮の花を東に置き、巽の花を南に置き、坤の花を西に置き、乾の花を北に置きて、方の如くに違せず、初夜は大阿の座の西なるが故に、其圖(下圖)、此の如く正方に之を置くなり。



五瓶各々散杖を立てとは。註に云く、

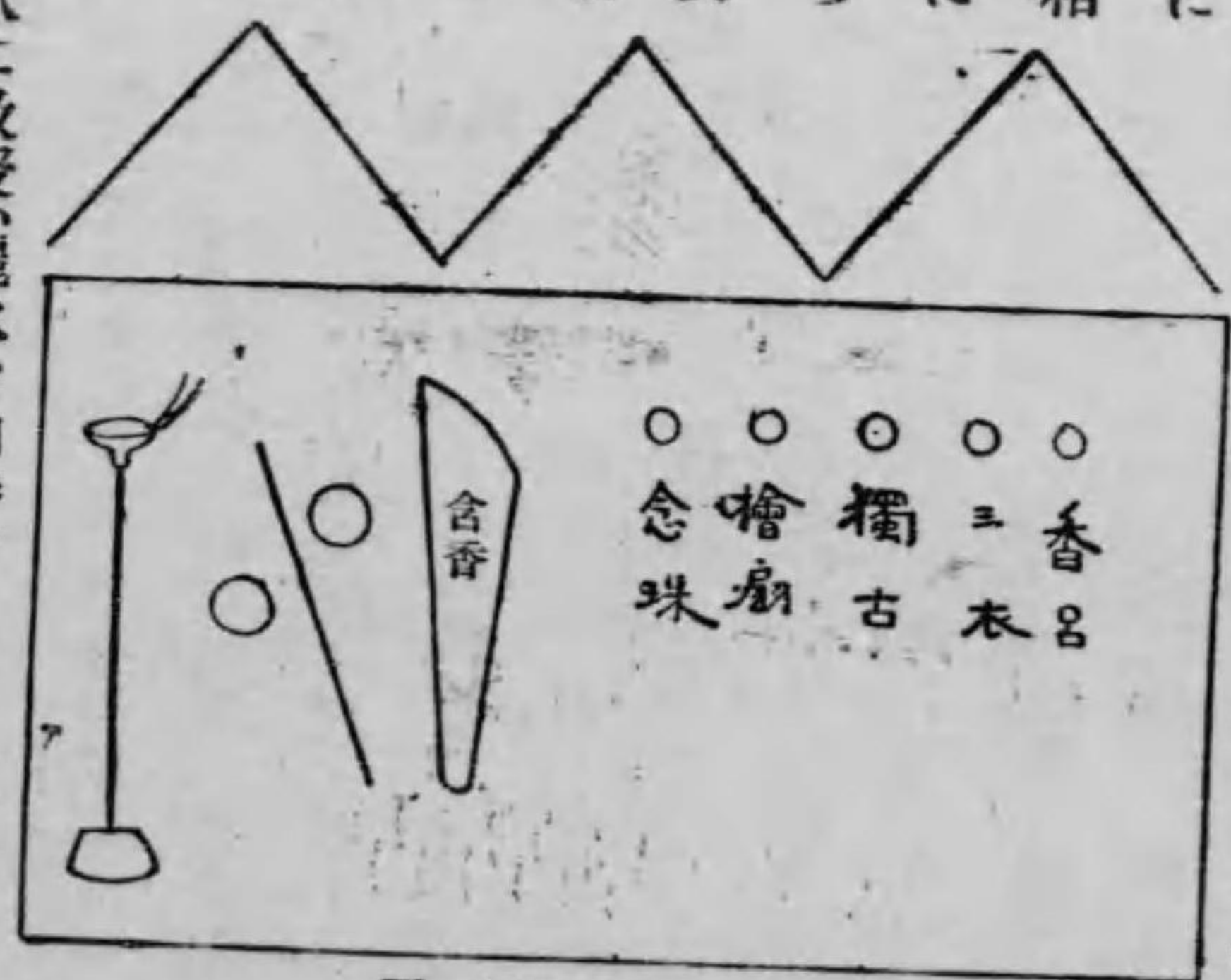
本説然りと雖も、散杖を立てざるの由、先師の口傳に示し給ふ。文當流の師傳は散杖は大阿闍梨之を立て、此の義具さに初夜の記の如し。

○引入所 事記  
に在り。

次に教授師の下は引入の作法を明すなり。  
教授の所作なり、輕易にすべからず、能意得可きのみ。私に云く、内陣隔て切るとは在りて、内庫と相隔つるなり。私に云く、受者に依らば等とは、謂く受者に貴賤あり、若し貴人を引入する時は、教授其の意得あるべきなり。

受者三衣・香呂\*

両手に塗らしむ。次に教授、灑水を加持すること。常の如し。三反受者に灑ぎ。次に丁子一二之を懐中すを含ましむ。次に覆面を取り左手に之を持ち、右劔印を以て之を加持する



引入所の机の圖

口決に云く、此の一條は専ら是れに云く、内陣隔て切るとは等とは。受者例の物具を持し來る、教授之を取りて机の上に置くなり(上圖の)次に教授加持香水等。

此の中塗香・灑水・相前却す。文永記に之を改めて云く、次に受者所持の扇・香呂・念珠・獨古・三衣袋を先づ机の上に置かしむ。次に塗香を取りて受者に與へて

○淨三業云云  
事記理記に出づ。

こと眞言七反許り。次に受者の頂に覆ふ、二複の帛を博て前後に之を打ち懸く、一の端は後にあり、別に之を結ぶことなし、又衣の内へも押し入れず、次第法則是の如くすべし。彼の私記と教授作法とに記する所の次第、聊か前後亂れて見たり。先師の記も文永に依りて之を改む、是れ亮元和上の口決なり。又實紹記に云く、先づ塗香を與へ、次に自ら塗香し、淨三業・三部・被甲教授許り之を作す次に灑水、次に舎香、次に覆面、次に印明と、文是れ亦文永に依りて次第を改む。加持香水とは、枳里枳里の呪、三返、續等加持常の如し、三たび器の端を叩き受者の頂に灑ぐ。次に覆面加持。口決に云く、屏風に掛けながら、劔印・慈救の呪三返、續等之を加持し、次に覆面を取りて中より二つに折り、折り目を後に爲し、二重の端の方を前へ打ち掛くるなり。將さに打ち掛けんとする時、覆面を手に持ち、告げて云く、一切惡趣の門を閉ちて、能く清淨の五眼を開かん。次に印を結ばしめ兩手の肘を以て、覆面の前を押さしむ。

次に三昧耶の印を結び、外縛して二中立て合せ、三昧耶薩怛𑖀、牒を取りて三反之を授くるなり。

次に香象を越えしむ等。此の一件は異義多端なり、具さに諸家の記の如し、今は

○香象 理記に  
頭註せり。

國譯傳法灌頂諸作法私記

但だ師承を明す。是れ此の記は、南向の堂、兩壇構へに就きて之を明す。今の堂は東向にして一壇構へなるが故に、初後夜同じく象の頭を西に向ふ、初後夜同じく右の足を先となして、之を越えしむ、是れ師承なり。

次に密語を授く等。具さに初夜記の如し。

次に花を以て印の上に挿むとは。

文の如く知る可し。打ち損する花等とは、口決に云く、若し打損する時は、三度マデハ打ち直さしむ可し。若し三度打ち損するとも又後夜に打たしむ可し、若し胎界を打たば投花成就するなり。

私に云く、已前作法等。

教授覆面を脱して左の手に掛け、次に(一)投花の尊を

示す。次に資をして大阿の方に向はしめ、大阿相對して告げて曰く、金剛薩埵等。云云

此の間に教授、散杖を以て五色の上より投華を攪寄せて、(二)五色の下より之を取り、

左の手に持して大阿に進む、大阿左の手を以て之を取り、右の手に取り直しながら、

密語を誦し、受者の頂に安ず、安し已りて葉末次に左の手に取り直し、持して之を教

授に渡す、教授右の手を以て之を取り、又左手に移して之を大阿に進む、是の如く三

度し畢りて、次に教授花を取りて、且く小机大壇の北方にありに置きて、覆面を屏風に掛く。次

(一) 投花の尊  
受者の數曼茶羅會上  
に投華せる時其  
の落し所の尊を示  
す。  
(二) 五色 大壇の  
周圍を繞れる五色  
金剛線なり。

に投花を紙に包み、上に種子等を書し、若し初後夜共に大日なれば實名。若し餘尊ならば、種子是の如く假包して、後に能く包み直して之を與ふ。此等の所作畢りて、教授退きて正面の邊に坐す。此の間に受者護身四禮等畢りて、次に引て小壇所に至るなり。

次に讚を催す等。皆初夜の記の如し。

次に教授小壇の五瓶を本の如く還し置く等とは。瓶を還し置く時は、草鞋を着

けず、只速に之を作す。先づ中瓶を還して、次に造花を立て、次に東南の二瓶、一度

に取りて、先づ艮、次に巽に之を還し置き、次に西北の二瓶を取りて、先づ坤、次に

乾に還し置きて各々造花を立つるなり。

後夜

繒綵蓮花等は色許り替へる等とは。謂く白・赤・黄・青・黒の次第、初夜と替はる

なり。其の標記等具に理記の如し方に違せずとは。方は即ち中・東・南・西・北、初夜と異ならざるなり、

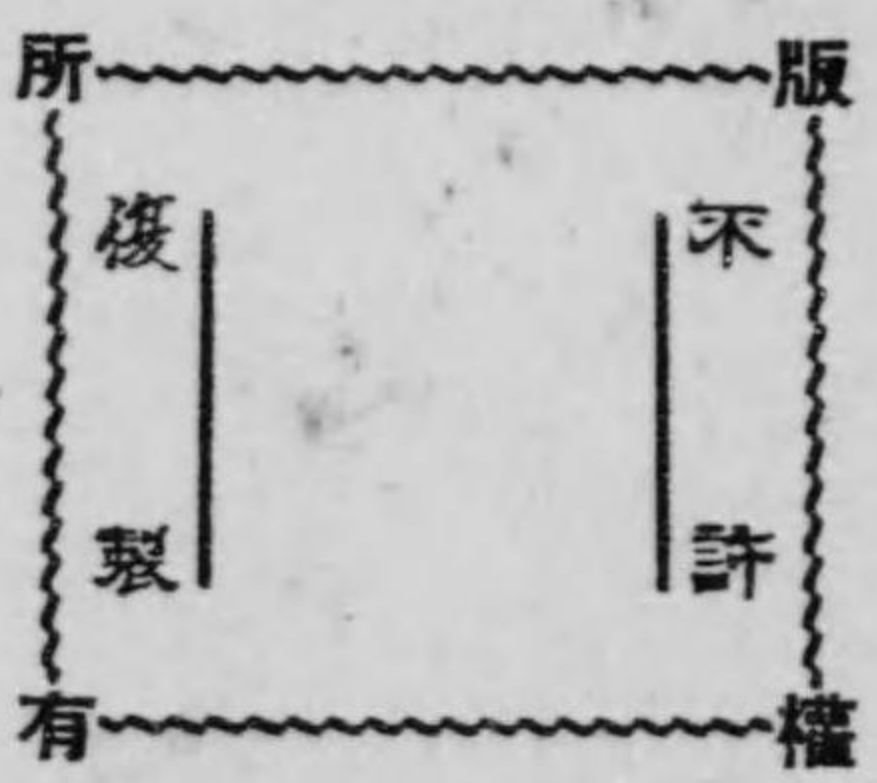
其餘は皆知る可し。

### 國譯傳法灌頂諸作法私記 終

大正十年一月六日印刷  
大正十年一月九日發行

國譯密教事相第壹奧付

〔非賣品〕



禁轉載

編纂者

東京府北豐島郡高田町字雜司ヶ谷三百十二番地  
塚本賢曉

發行者

東京市牛込區若宮町三十五番地  
伊豆宥法

印刷者

東京市本郷區湯島三組町八十一番地  
川邊多門

印刷所

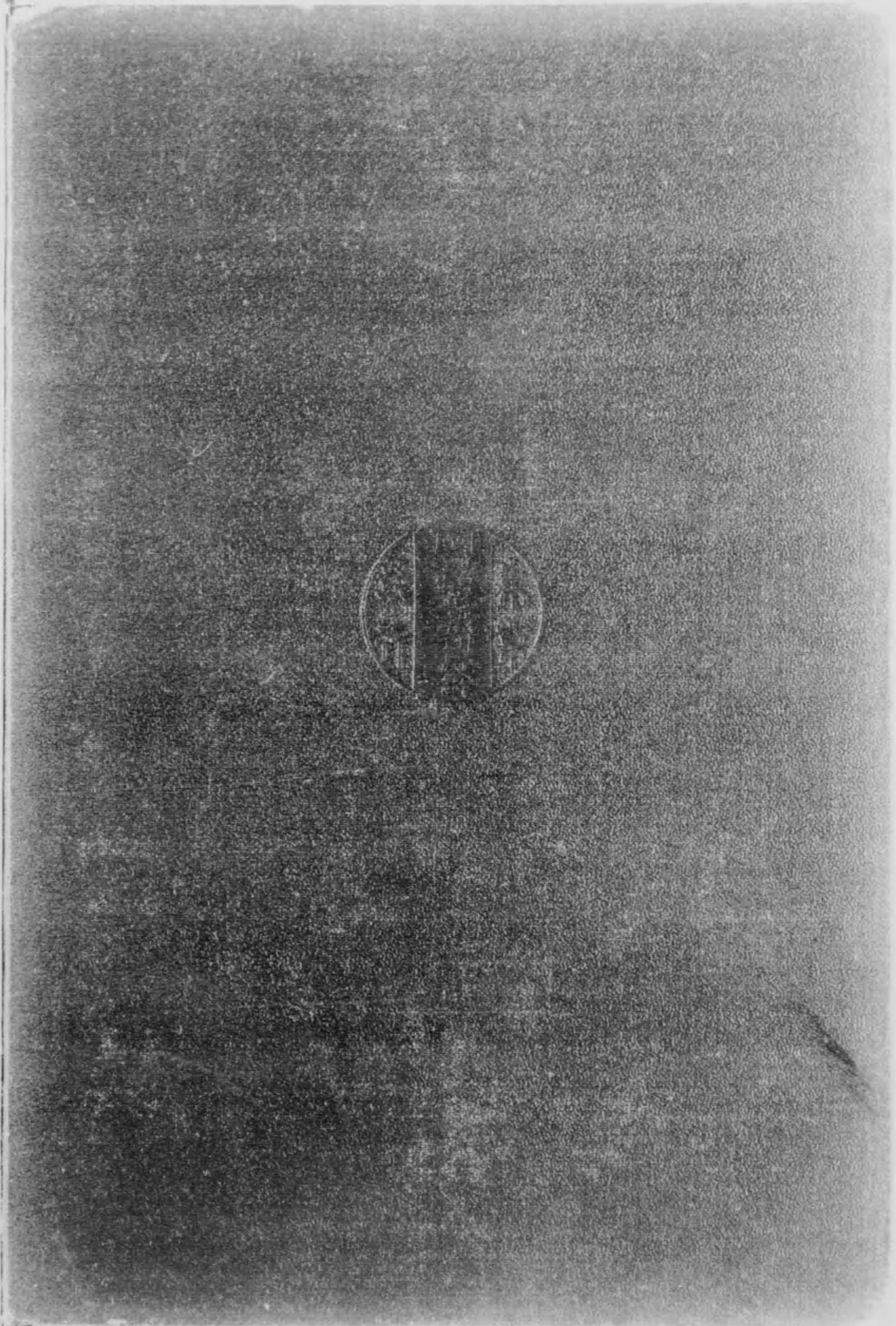
東京市本郷區湯島三組町八十一番地  
川邊活版所

發行所

東京市牛込區若宮町三五  
振替東京五〇一八七

國譯密教刊行會

383  
28r



終